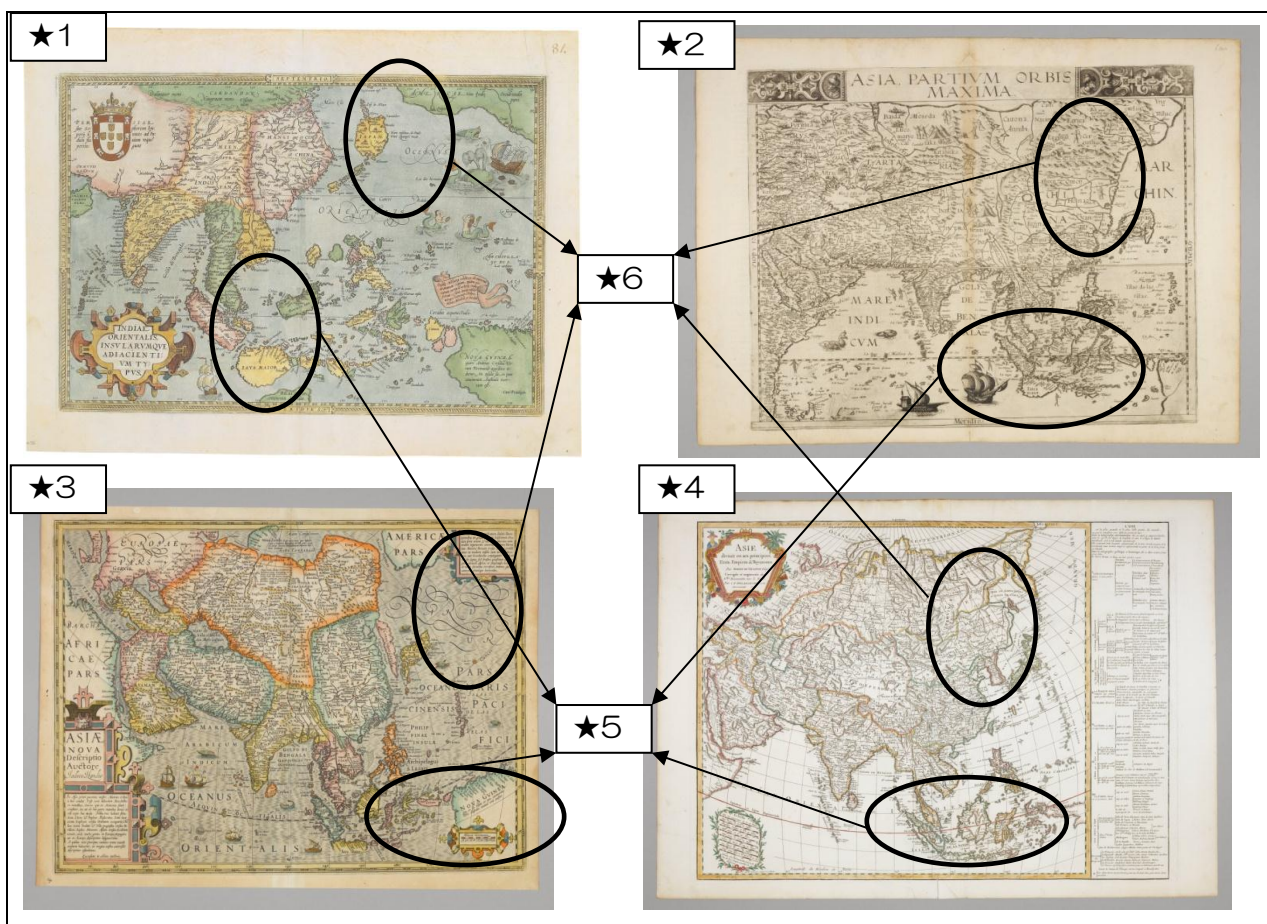


## 授業で使える当館所蔵地図

No.15

| 名称   | 作成年       | サイズcm | 作者・版元など                                   | 形態    |
|--|-----------|-------|---|-------|
| 左上<br>『INDIE INSVLARVMQVE<br>ADIACIENTIVM TYPYS』 | 不明 1570年頃 | 59×44 | 不明  | 銅版手彩色 |
| 右上<br>『ASIA PARTIVM<br>ORBIS MAXIMA』             | 不明 1593年頃 | 56×42 | 不明  | 銅版墨刷  |
| 左下 『ASIA』  | 不明 1600年頃 | 54×41 | 不明  | 銅版手彩色 |
| 右下 『ASIE』  | 1791年     | 55×78 | Robert de Vaugondy 著<br>C・F・Delamarche 発行 | 銅版手彩色 |



### 【解説】

16～18世紀のアジア図である。描かれている地域はおおむね同じだが、細部にはその時代毎の地理上の発見が反映されている。時代順に見ていく事で、特に東南アジア南東部と東アジア北部の地理的情報が、この時期に一気に増加したことが読み取れる。

同時期に発行された地図でも、この2つの地域に関しては大きな違いが見られることから、地理上の発見がすぐに地図作成に反映されたわけではない事もわかる。

★1 この地図は、世界最初の近代地図帳と呼ばれているアブラハム・オルテリウスの『世界の舞台』の中の「東インド図」と同内容であると考えられる。同時期の地図学者メルカトルが前年の1569年に発行した世界図に酷似しているが、メルカトル図法ではない。

16世紀のポルトガルとスペインによる地理的発見が盛り込まれている一方で、不明な部分は前代までの知識で補填されている。その後1612年までの間に数々の改訂版が出版される過程で、随時地理的発見が反映されていくことになる。

★2 この地図は、1593年に発行されたヘラルド・デ・ヨーデとその子コルネリスによる「アジア図」であると考えられる。東アジア北部と東南アジア南東部に関して前図よりも現代に近づいてはいるが、朝鮮半島、ボルネオ島東部、ジャワ島南部、ニューギニア島に関する情報が入っていないことがわかる。

★3 この地図は、1623年に発行されたアントワープの地図製作者ホドカス・ホンディウスによる「アジア新図」であると考えられる。朝鮮半島は出現したが島になっている。逆にジャワ南部は探検の結果今までの地図が違ふということがわかり、海岸線が消滅し、保留状態になっている。

★4 この地図は、1791年(92?)にフランスの地理学者ドラマルシャが発行した「アジア図」で、1750年に同じくフランスの地理学者ロベール・ヴォゴンディの『世界地図帳』の中にある「アジア図」の縮尺を修正したものである。ニューギニア島西部をのぞき、東南アジアはかなり現代に近い状態になっている。東アジア北部では北海道の形状が不完全であるが、朝鮮、日本、千島、サハリンなどの相対的な位置関係はかなり現在の地図に近い状態になっている。

★5 東南アジア南東部の形状は4枚の地図の時代が進むにつれ大きな変化が見られる。特に次の3点に注目するとわかりやすい。

#### 1. ジャワ島南岸の形状

★1では、ジャワ島が実際より大きく丸く描かれており、南岸には一切地名がない

★2でも同様に、ジャワ島が大きく丸く描かれ、南岸に地名がない

★3では、1596~97年にハウトマンがジャワ南岸を巡航した結果、今まで考えられていたような大きな陸地ではないということが判明したため、ジャワ島は南北に縮められたが、測量したわけではないため南岸は空白となっている。

★4の時代になるとほぼ現在のよう大きさに描かれている。

#### 2. ボルネオ(カリマンタン)島およびスラウェシ島東部の形状

★1では、ボルネオ島が現在よりはるかに小さく、スラウェシ島もモルッカ諸島との位置関係は比較的よいが形状はおよそかけ離れている。ボルネオ島との位置関係も全く異なっている。

★2では、ボルネオ島は少し大きくなり、スラウェシ島との関係もよくなっている。ただし、ボルネオ・スラウェシ両島とも、東部の表現が粗い。

★3では、両島とも★2の段階とあまり変わっていない。

★4では、比較的現在に近い状態にはいるが、スラウェシ島北東部の湾だけは見落とされている。

#### 3. ニューギニア島

★1★2★3ともに、ニューギニア島が未知の巨大大陸として描かれている。西部の半島が島として描かれているものもある。

★4では、やっとその姿が現在に似てきたが、同時代の世界図を見てもニューギニア西部が地図の端となっており、それ以东の記載がない場合が多い。また、オーストラリア大陸とつながっているものもある。現在のように全貌が明らかになるのは19世紀に入ってからではないかと思われる。

これらの3点に大きな違いが見られるのは、そこが香辛料貿易で使われない場所だからである。マラッカ海峡から南シナ海に入り、ジャワ島とボルネオ（カリマンタン）島の間を通過してモルッカ諸島に向かうルートを描いてみると、上記の3点は航海をする上で必要不可欠な場所ではない場所であることがわかるだろう。

★6 東アジア北部の形状についても4枚の地図の時代が進むにつれ大きな変化が見られる。特に次の3点に注目するとわかりやすい。

#### 1. 日本の形状

★1 以前の世界図にはそもそも日本が描かれていないこともあるが、16世紀中頃までにポルトガル人が鹿児島あたりまで、16世紀中頃は九州全体まで渡来するようになり、琉球～九州までは実際に知られるようになった。（1543年種子島に鉄砲伝来 1571年長崎に商館建設）これ以降ヨーロッパ人は中国や日本で入手した日本図と宣教師からの情報を元に日本列島を書き入れるようになっていく。16世紀中頃の世界図では本州北端が大陸と接続し、朝鮮半島のような形状になっているものもある。

★1の地図では琉球列島の北に大きな一つの島として描かれている。南部にはCangoxima（鹿児島）があり形状も九州を思わせるが、同じ島にAmaguco（山口？）Miaco（都？）Bandu（板東）などが列記されており、断片的な知識を元に適当な作図がされたものと考えられる。この時代にはすでにポルトガル人宣教師の情報により、★2程度の日本地図は作られており、★1の作者はそれを未知、もしくは無視したものを思われる。

★2の地図のような日本図は通称「ドウラード型日本図」と呼ばれており、16世紀はじめの中国で作られたものがポルトガルに流出し、作られたと言われている。16世紀半ばの日本図にはこの形状が多い。日本列島が近畿地方までしかないのがその特徴である。地図中にはFacata（博多）、Ozaqua（大阪）Casai（堺か？）があるが、一方で東岸にI das iadrones（海賊島）という謎の地名もある。

★3の地図のような日本図は通称「テイシェイラ型」と呼ばれており、北海道をのぞく日本列島が比較的現状に近い形状で描かれるようになっていく。Bungo（豊後）やHivami（石見）Sando（佐渡）Hixe（伊勢）Meaco（都）はあるが、まだ江戸は書き入れられていない。

★4の時代になると北海道以外の日本に関してはほぼ問題なく表示されている。Jedo（江戸）はもちろん、伊豆諸島や、国内の山脈などまで表記されているが岐阜に関する記載はない。

#### 2. 朝鮮半島の形状

★1の地図には朝鮮半島の記載はない

★2の地図には半円形の半島として描かれ、Costa de coora?と書かれている。

日本が「ドウラード型」で描かれている同時代の地図では丸い島になっているものもある

★3の地図では大陸と切り離された島として描かれておりCoreaと記載されている

★4の地図に至ってようやく現状に近い状態で描かれるようになった。

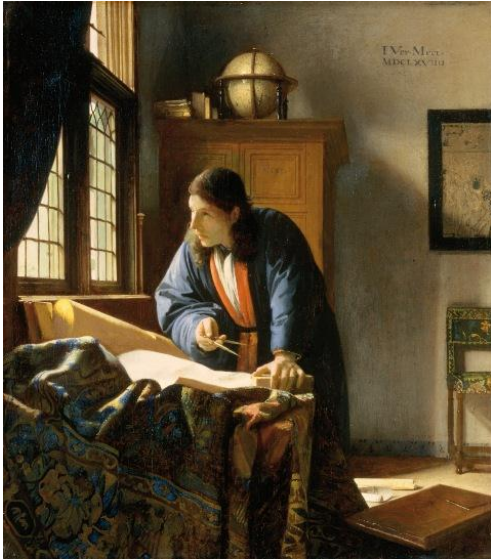
#### 3. 日本以北の形状

★1の地図はインド図ということもあり日本以北は多く描かれていないが、同時代の世界図でも未知である様子がうかがえる。

★2の地図でも本州以北に島はなく、未だに未知であることを示している。

★3の地図でも本州以北に島はなく、未だに未知であることを示している。

★4の地図では北海道や樺太の形状が大きく異なっているものの、千島列島やカムチャッカ半島、オホーツク海などの相対的な位置がかなり現状に近い状態になっている。この背景には18世紀前半に行われたロシア人ベーリングの探検の成果があると考えられる。これ以前にも★3と★4の間の時代には多くの断片的な北方探検があったが、断片的であることが逆にこの地域の地図製作を混乱させ、多くの謎の地図を産み出している。



#### 【用語について】地理学者

本解説内に登場するオルテリウス、メルカトルをはじめとする人物は地理学者（地図学者）などと称される事が多い。左の絵は1669年にヨハネス・フェルメールによって描かれた「地理学者」である。16世紀の後半地図作成の中心地はアントワープであったが、17世紀に入り、その中心はアムステルダムに移った。オランダの東インド会社によって集められた世界の情報が地図製作を支えたと考えられる。この絵の中で棚の上に置かれているのは1600年以降発表されたホンディウスの地球儀であり、壁に掛けてあるのは17世紀初期に発表されたW.J.ブラウの「ヨーロッパ海図」である。この人物は特定の地理学者であるとは特定されていないが、海洋国家として繁栄するオランダを象徴する職業であるといえよう。

#### 【利用の例】

##### ○当時のヨーロッパ人のアジアにおける認識を理解できる。

→世界史の授業で、東南アジア南東部に注目し、大航海時代の香辛料貿易ルートを考えさせ、地図上に記入することで、スマトラ島、ジャワ島の北岸やモルッカ諸島、フィリピンなどルート上にある地域の地図がいかに早い段階から正確であり、逆にルート上ではないボルネオ島スラウェシ島間やニューギニア島などの地域がいかに遅くまで適当に描かれていたのかに気づかせることができる。（あわせて生徒自身に家の近所の地図を描かせると、当時の地図と実際の地形の間にあるゆがみを実感として理解することを促すことができる）

→日本北方がベーリングの探検以前に未知であったことを理解することができる。

##### ○なぜ九州地域の地形や地名が詳しく描かれているのかを理解できる。

→キリスト教布教の拠点として利用された地域や貿易港、鉱山など重要な場所が優先的に描かれていることを理解させることができる。Cangoxima（鹿児島）Amaguco（山口？）Miaco（都？）Bandu（板東）Facata（博多）、Ozaqua（大阪）Casai（堺か？）Bungo（豊後）やHivami（石見）Sando（佐渡）Hixe（伊勢）Meaco（都）など判別できる地名が多数描かれている。

##### ○大航海時代に使用された船種を理解できる。

→地図上に描かれた船に注目する。

##### ○当時のヨーロッパ人の辺境に対する感覚を理解できる。

→地図上に描かれた奇妙な動物（魚類）に注目する。